

10. P-ANCA 陽性急速進行性糸球体腎炎(RPGN) に対し、アフェレシス療法単独の効果を 観察し得た 1 症例

伊藤千春・秋元 哲・安藤康宏・武藤重明
草野英二・浅野 泰
自治医科大学腎臓内科

RPGN の治療には、ステロイド薬、免疫抑制剤、抗血小板薬、抗凝固薬などを併用するカクテル療法を行うことが多く、更にアフェレシス療法 (PP) の併用も有効とされるが、PP 単独の効果は検討されていない。今回我々は、PP 単独の治療効果を観察し得た RPGN の症例を経験したので報告する。

症例は 71 歳男性。P-ANCA 陽性 RPGN 治療目的で当科入院。腎生検組織上半月体形成性糸球体腎炎の像を認めた。治療に当たり、入院前血痰を認め入院時ツ反強陽性であり、年齢も考慮の上強力な免疫抑制療法は危険と考えた。そのため当初 PP のみで 8 W 経過観察し、この間に PEX 5 回、DFPP 2 回を施行した。P-ANCA は、各 PP 後一過性に低下したのみであったが、腎機能については sCr 値、CCr とも初回 PP 以後改善傾向を認め、8 W で sCr は 3.68 から 2.91 mg/dl に、また CCr は 8.7 から 27 L/day へと改善した。これ以後は少量ステロイドとミゾリビン投与にてこのレベルの腎機能を維持しえた。以上より RPGN に対する PP 単独の効果が評価でき、内科的治療と PP 併用の有効性が示された。

11. 原発性抗リン脂質抗体症候群の妊娠早期における血漿交換療法の 1 例

倉本充彦*1・長田久夫*2・高林克日己*3・木原真紀*2
三河健治*1・斎藤 康*3・関谷宗英*2・織田成人*1
平澤博之*4
千葉大学医学部人工腎臓部*1、同産婦人科*2
同第二内科*3、同救急部・集中治療部*4

症例は 42 歳女性。平成 6 年妊娠 11 週にて流産した際、原発性抗リン脂質抗体症候群の診断に至った。平成 7 年妊娠しステロイド漸減投与にて第 1 子出産するも肺高血圧症にて新生児死亡。平成 9 年妊娠判明、プレドニゾロン 40 mg 内服を開始し、周産期管理目的で当院産婦人科入院となった。入院後ヘパリン 5,000 単位持続静注を開始、また抗カルジオピリン抗体 (α CL) 203.6、抗核抗体 (ANA) 1,024 倍と高値であったため妊娠 13 週より二重膜濾過血漿交換 (DFPP) を週 2 回ずつ開始した。DFPP を 4 回施行した時点で

α CL 46.7、ANA 16 倍まで改善したが、IgG 319 mg/dl と低下がみられ、以後ステロイド中等量継続投与とヘパリンの持続静注のみで経過観察した。その後 α CL 141.4 と再上昇、ループスアンチコアグラントは陽性が続いたが、胎児の発育良好、血栓症の兆候もなく妊娠 32 週にて出産となった。新生児に肺高血圧症はみられていない。原発性抗リン脂質抗体症候群の妊娠早期に血漿交換を施行することにより、ステロイド大量療法の妊娠および胎児への副作用を軽減する可能性がある。

12. 血漿交換療法にて救命し得た深昏睡を伴った Acute on chronic の 1 症例

建部一夫・渡邊 仁・梁 広石・森谷泰和
木田一成・津田裕士・高崎芳成・橋本博史
順天堂大学膠原病内科

我々は今回アルコール肝硬変の患者がアルコール加重により V 度の昏睡を呈した症例に対し、血漿交換療法 (SFPP) を施行し救命し得たので報告する。

【症例】55 歳、男性。平成 2 年頃よりアルコール性肝硬変の診断で治療を受けていたが、今回過労およびアルコールの加重により急性増悪を認め他院にて入院加療を受けるも症状更に増悪し、意識も II の昏睡より V 度の昏睡となり当院に転院となった。当院転院後より直ちに血漿交換療法 (FFP 30 U/日) を連日行った所、3 回目より徐々に意識の改善を認め 5 回目終了時には完全に意識は改善が認められた。

【考案】代償された慢性肝不全に何らかの原因が加わって急性肝不全に陥る症例、いわゆる “Acute on chronic” は予後は著しく不良であることが知られている。本症例は、意識状態も悪く非常に予後不良と予測されたが血漿交換療法にて劇的に改善を認め血漿交換療法が特に有効であったと考えられた。

13. サルモネラによる敗血症性ショック患者に対する血液浄化

白田美穂*・池田寿昭*・池田一美*・金子英人*
松尾麗子*・亀井俊郎*・神里 潔*・石井脩夫*
久野木忠**・畑谷重人**
東京医科大学八王子医療センター麻酔科*
同臨床工学部**

サルモネラによる敗血症性ショック患者に対し、ICU 入室早期より急性の血液浄化を行い、各種メディエーターを測定することができた症例を経験したの

で報告する。

【症例および入院後経過】61歳，男性。平成9年7月27日，下痢，腹痛のため，近医受診し入院となる。その後，急速に病態の悪化（急性腎不全，呼吸不全，循環不全）をきたしたため29日当センターへ搬送，入院となった。血液培養にてサルモネラ09群が検出され，直ちに，エンドトキシン吸着（PMX）およびCHDFを施行した。PMX開始前のエンドスペシーは36 pg/ml，IL-6は185 pg/ml，IL-1raは5,410 pg/ml，NO_xは1,812 μmol/L，ICAM-1は613 ng/ml，PAI-1は356 ng/mlといずれも高値を呈していたが，2回のPMXにてそれぞれ，3.0 pg/ml，98.9 pg/ml，1,810 pg/ml，958 μmol/L，647 ng/ml，74 ng/mlとなり，ICAM-1を除いたメディエーターの減少を認めた。その後，サルモネラによる敗血症性ショックは改善したが，敗血症性ARDSを併発し9月10日永眠された。

【結語】早期よりの血液浄化は敗血症性ショックには有効であったが，ARDSの悪化を防ぐことは困難であった。

14. 重症急性膵炎に対する特殊治療の臨床的検討

岩田誠一郎・森村尚登・円谷 彰・内田敬二

山本俊郎・杉山 貢

横浜市立大学医学部救命救急センター

重症急性膵炎に対する特殊治療として膵酵素阻害剤持続動注療法（以下CRAI），持続血液濾過透析（以下CHDF），腹膜灌流などがあげられている。最近2年間の当施設における特殊治療症例3例を臨床的に検討した。診断は厚生省難治性膵疾患調査研究班の診断基準によった。

【症例】内訳はCRAIが1例，CHDFが2例であった。症例1は35歳男性，日高らの予後点数は入院時4.5点，消化管穿孔を否定できず開腹手術施行され，壊死性膵炎の診断でCRAIを施行した。症例2は39歳女性，予後点数は入院時4.5点，CT上浮腫性膵炎で同日よりCHDFを7日間施行した。症例3は47歳の男性，予後点数は入院時4.5点，CT上浮腫性膵炎で同日よりCHDFを8日間施行した。3例ともに特殊治療後の経過は良好で，特殊治療に伴う合併症はなかった。特殊治療施行上の問題点はCRAIで動注カテーテルの位置保持のため筋弛緩薬の使用が必要であったこと，CHDFでは明確な離脱基準がないことであった。

【結語】3例の経験では予後点数において1点以上を集中治療の適応とし，2点以上で特殊治療を考慮した。また壊死性膵炎はCRAIを，浮腫性膵炎はCHDFを選択した。

S-1. 急性難治性熱性疾患に対するプラスマフェレーシスの有用性

高木信嘉

横浜市立大学医学部第二内科

近年多くの疾患に対しプラスマフェレーシス治療の適応が拡大され，良好な成績が報告されている。今回我々は，従来よりの治療に抵抗性を示した，難治性の熱性疾患に対しプラスマフェレーシスを試み，著明な効果を認めたので報告する。ステロイド治療では解熱できなかった成人発症型Still病3例に対しては二重濾過血漿交換療法を，大量ガンマグロブリン療法無効の小児川崎病6例とステロイド治療無効の小児若年性リウマチ2例に対し血漿交換療法を各々施行した。全例で著しい高熱が持続しており，全身状態の増悪が認められ早急な解熱治療を要する状態であった。プラスマフェレーシス治療後全例で速やかな解熱が認められ，著明な上昇を示したCRPも急速に低下し正常化し，全身状態も改善した。

以上の治療成績より，上記熱性疾患で従来よりの治療では難治の例では，全身状態の増悪を防ぐことが急務と考えられ，プラスマフェレーシスが第一選択の治療適応と考えられ今後の有用性が期待される。

S-2. 急性期全身性エリテマトーデスに対するアフレルシス療法

金井美紀・建部一夫・渡邊 仁・森谷泰和

梁 広石・木田一成・津田裕士・高橋芳成

橋本博史

順天堂大学膠原病内科

全身性エリテマトーデス（SLE）の治療はステロイドが主体であるが急性期の病態では血液浄化療法を必要とすることがある。今回我々は急性期のSLEに対しアフレルシス療法を施行し，有用と考えられたので報告する。

脳梗塞を併発した抗リン脂質抗体症候群（APS）の二例にデキストラン硫酸カラムを用いた免疫吸着療法を施行，また血栓性血小板減少性紫斑病（TTP）を併発した一例に新鮮凍結血漿を使用した単純血漿交換療法（SFPP）を施行し改善を認めた。急性期の